

書院生が『華語萃編』初集で学んだ中国語

塩山正純

0. はじめに

本稿は1916年刊の初版『華語萃編』初集を資料として、書院生が学んだ北京官話の特徴について初歩的な考察を行うものである。『華語萃編』は東亜同文書院（以下：書院）が編纂した中国語会話教科書で、初集から四集まであり、初集は凡例冒頭に「本書初集は東亜同文書院第一学年用北京官話教科書として編纂せるもの」とある。初集の会話課文は一人称代詞の包括・非包括を区別するなど、太田（1969）の北京語の7つの特徴を満たし、二人称“您納”も用いるほか、“皮酒”など特徴ある外来語音訳の例も見られる。

1. 成立までのプロセスと四年の語学教育課程の教材としての『華語萃編』

石田（2019）等によると、『華語萃編』の成立過程の端緒は御幡雅文の『華語跬歩』で、「明治丙戌」即ち1886年の未定稿版（関西大学鱒澤文庫本）が最も古い。1890年或いは1891年に日清貿易商会蔵版が、書院が開校した1901年に東亜同文会幹部の柏原文太郎編輯版が刊行され、1903年からは文求堂書局が市販もした版本が、1908年以降はその増補版が版を重ねた。1905年には高橋正二の『北京官話音声譜』、小路真平と茂木一郎の『北京官話常言用例』も刊行された¹⁾。以上の三書と『華語萃編』の会話本文に顕著な一致は無いが、例えば『華語萃編』附録の「名詞集」は、『華語跬歩』の天文類から顔色類と類似しており、掲出語彙も『華語跬歩』を基に加筆されており、『華語跬歩』が『華語萃編』の基礎の一つであるとするのが妥当である。1901年の書院開校時に『華語萃編』は刊行されておらず、石田（2019）によれば『華語跬歩』『北京官話音声譜』『北京官話教科書』などが教材として活用されていた。『華語萃編』は初集～四集の4冊1セットで四年間の課程で学年毎に使用すべく編纂された。『華語萃編』初集は開校から15年経った1916（大正5）年に初版が刊行され、以来一年生用の教科書として活用され続けた。二集は1924（大正13）年、三集は1925（大正14）年、四集は1933（昭和8）年というように遅れて刊行されたため、二～四集の出版以前は『官話指南』『談論篇』等の教材が上級生用で使用された。本稿は長期間使われ続けた

『華語萃編』初集の初版を対象に、その場面設定や語彙の特徴について考察する。

2. 『華語萃編』初集の構成と場面設定

『華語萃編』初集の冒頭は音節一覧「華語音譜」、全音節の声調練習「華語聲音編」で、第一編は数字を学ぶ第一課「聞一知十」、第二～七課の問答の羅列「散語問答」が続く。第一編の第八～廿二課、第二編の全16課及び第三編の全22課の計53課が長尺の会話課文で、登場人物は基本的に上海で生活する人物（話者）で、日本人学習者用の教科書ではあるが、日本人が登場するのはアミカケの計19課のみである。巻末に語彙一覧「名詞集」がある。

第一編

- 8 詢僕履歴 [主：日本人の雇い主 僕：使用人の応募者]（使用人の採用面接）
- 9 初會周旋 [甲：孫姓 乙：黄姓]（初対面のコミュニケーション）
- 10 使令僕役 [主：雇い主 僕：使用人]（使用人に友人との茶飲み話の用意をさせる）
- 11 使令僕役 [主：おそらく日本人の雇い主 僕：使用人]（朝食の段取りを指示する）
- 12 晚餐勸飲 [甲：晚餐の主催者 乙：客 僕：甲の使用人]（自宅の晚餐会で酒を勧める）
- 13 買物詢價 [客：買い物客 賈：食料品店の者]（食料品店での買い物）
- 14 兌換銀圓 [客：両替したい客 賈：両替商の店員]（日本円を中国のお金に両替する）
- 15 舊友重逢 [客：旧友のうち訪ねてきた者 主：旧友のうち在宅の者]（旧友の再会）
- 16 循循善誘 [師：中国語教師 主：学習者]（先生が学生に中国語を教える場面）
- 17 溫故知新 [師：中国語教師 甲生：学習者1 乙生：同2 丙生：同3]（同上）
- 18 起居瑣言 [主：おそらく日本人の雇い主 僕：使用人]（起床から出かける支度まで）
- 19 搭坐電車 [甲：乗客1 乙：乗客2 賣票人：電車の切符売り]（市内電車に乗る）
- 20 詢問路徑 [甲：道を尋ねる人 乙：教える人1 丙：教える人2]（道を尋ねる）
- 21 乘人力車 [甲：人力者に乗る人1 乙：同2 車夫：人力車夫]（人力車に乗る）
- 22 預計考期 [甲：学生1 乙：学生2]（学生同士がまもなくの試験を話題にする）

第二編

- 1 道賀新正 [賓：年賀に訪れた客 主：家の主人]（新年の挨拶）
- 2 年假宜短 [甲：中国人 乙：日本人]（年末年始の休暇について話す）
- 3 上元佳節 [甲：日本人 乙：中国人]（元宵節の賑わいについて話す）
- 4 茶樓茗談 [甲：茶館の客1 乙：同2 堂倌：ボーイ 售報人：新聞売り]（茶館利用）
- 5 邀友便酌 [賓：客 主：ホスト 堂倌：ボーイ]（レストランでの注文と食事）

- 6 因友致友 [甲：紹介者 許：許荷亭 唐小山：唐小山] (ふたりの友人を紹介する)
- 7 冬日圍爐 [甲：説明する方 乙：尋ねる方] (冬の日に暖を取ることを話す)
- 8 安設電燈 [局：電話交換手 主：主人 用人：使用人 公司来人：会社から来た人 電燈工人(工)：工事する人] (電灯をつける工事をする)
- 9 郵政須知 [寄信人：郵便を出す人 局員：郵便局員] (郵便・送金に関する質問と答え)
- 1 0 打電報費 [甲：電報を出したい人 乙：教える人 局員：電報局員] (電報を打つ)
- 1 1 送上火車 [甲：見送る人 乙：列車に乗る人] (列車で出かける人を見送る)
- 1 2 車中閑話 [甲：列車に乗り合わせた人 1 乙：同 2] (列車内での雑談)
- 1 3 寶主如歸 [棧夥：旅館の従業員 客人：客 客棧管事(管事)：番頭] (旅館での交渉)
- 1 4 搭坐輪船 [甲：船で上海に帰る人 乙：それを見送る南京の人 票行：切符売りのスタッフ 茶房：船内のボーイ] (切符を買って客船に乗る)
- 1 5 飭僕洒掃 [主：雇い主 僕：使用人] (反応のにぶい使用人に大掃除の指示をする)
- 1 6 規誠傭人 [主：雇い主 僕：使用人] (無断外出が発覚し主人が使用人の心得を説く)

第三編

- 1 緩歩春郊 [秦：訪問者 朱：家の主人] (春の陽気に龍華寺への散歩に誘う)
- 2 龍華會裡 [秦：訪問者 朱：家の主人] (第一課の続きで、出かけた先での会話)
- 3 出洋留學 [中：浙江人の劉某 日：書院生の木村某] (お互いのことを尋ねる会話)
- 4 饋問舊友 [實：来客 僕：使用人 主：家の主人] (日本からの帰国報告時の会話)
- 5 託租住宅 [甲：借家を探す人 乙：相談にのる人] (日本人が借家探して中国人に相談)
- 6 雇用厨役 [僕：使用人 主：家の主人でおそらく日本人 厨：料理人に応募した人] (料理人に応募してきた人への面談で、経歴や日本料理が作れるか等を確認する)
- 7 置配浴所 [主：雇い主 (日本人) 僕：使用人 (中国人)] (家に風呂場を設ける相談)
- 8 新式粧梳 [待詔：散髪屋 主：家の主人] (散髪屋を家に呼んで、散髪しながら流行の髪型などの世間話をする)
- 9 曷澣曷否 [主：家の主人 洗：洗濯屋] (洗濯屋が仕上り品を届けに上がった際に家の主人がその出鱈目な仕事に小言を言い、洗濯屋が言い訳をする)
- 1 0 傳喚成衣 [主：家の主人 下：使用人 成衣：仕立屋] (家に仕立屋を呼んで、洋服を眺めるために、あれこれとコンセプトを相談する)
- 1 1 中外衣料 [中：中国人 東：日本人] (中国と日本の服飾の特徴の違いを話す)
- 1 2 學而不厭 [東：日本人 中：中国人] (中国語学習する日本人が発音練習を乞う)

1 3 聘請西席 [東：同上 中：同上] (同僚の中国語学習のため教師の斡旋を依頼する)

1 4 巧書謝函 [東：同上 中：同上] (日本人が中国人に手紙の書き方・作法を教わる)

1 5 積貨求售 [甲：店の小番頭 乙：趙さん] (商品としてのゴマを売る商売話をする)

1 6 幹蠱之子 [甲：本屋を営む陶姓 乙：蔡姓] (甲がファミリーヒストリーについて話す)

1 7 託人借貸 [甲：助ける側 乙：依頼する側] (入るべき金が入らず、友人に助けを乞う)

1 8 梁上君子 [甲：聞き手 乙：泥棒に入られた人] (泥棒に入られた友人の状況説明に対して、聞き手が諺、俗語の教訓も交えてアドバイスする)

1 9 同氣連枝 [叔：訪ねて来た叔父 姪：この家の姪 嫂：この家の兄嫁 (姪の母)] (外国語専攻を卒業した弟が兄の友人の口利き依頼に来た際、この家の兄嫁と会話する)

2 0 延醫診治 [醫：医者 病：腹痛で受診した患者] (赤痢コレラを心配する患者に、医者は蟹の食あたりと見立て、問診、聴診、服薬・食事のアドバイスをする)

2 1 問慰疾病 [甲：友人の病を見舞う人 乙：臥せる人] (臥せる友人を見舞い、病状、健康について話した後、見舞う側の弟の病気にも話が及ぶ)

2 2 辭別還鄉 [日：一時帰国する日本人 中：友人] (友人宅に一時帰国の挨拶に訪れる)

会話の場面は基本的に上海とその近郊、上海-南京間の移動であるが、2-8 安設電燈「2-8-5 司是您是那兒 2-8-6 主我們是金魚胡同的吳宅」、3-1 6 雇用厨役「3-6-6 主啊你原先都是在那宅裡待過 3-6-7 厨我先在前門外頭范宅伺候過幾年後來又在交民巷日本欽差衙門裡山田老爺那兒伺候了三年新近主人回國了纔下來不幾天兒」、3-1 6 幹蠱之子「3-16-4 乙恭喜在那兒 3-16-5 甲豈敢在東四牌樓隆福寺開着個小書舖」などは明らかに北京が場面であり、先行教科書の内容との継承関係の調査が必要である。会話に登場する固有名詞は少なく、実在したか否かの判別はさておき、確認できるのは「三井洋行、加藤洋行、上海醬油園、太陽皮酒⁹⁾、正金銀行、亨達利洋行、青蓮閣、雅敘園、日昇樓、一壺春」の 10 例である。

3. 伝統と新たな概念が混在する時間の異文化翻訳

19 世紀の中国で西洋式の時計が普及すると、時間表現に伝統と西洋式新概念が混在し、本書の成立時期には概ね西洋式の表現が定着した。本節では本書の時間表現を概観する。各用例冒頭の数字は「編-章-節」、ゴシックは話者、囲みは該当語句を示す (以下同)。

3. 1 時点の表現

時点とその疑問の表現を概観すると、古い時代、近々の日にち、「このあとすぐ」、具体的な時点は幅広く“多嚙(多咱)”(12 (2) 例)、“甚麼時候兒(什麼時候兒)”(7 (1) 例)で問

う。日付・半日単位は“幾時”、“幾兒”で問われ、具体的な時刻は“下兒鐘”と“點鐘”で表現し、“幾點（幾點鐘）”で問う。日付は“幾兒”でも問われ、曜日は“禮拜”で表し、“禮拜幾”で問う。「近頃、この頃」は、北京語の特徴とされる“這程子”（3例）を用いる。

- 1) 3-2-1 秦這個廟是多啗修的 3-2-2 朱據說是三國時候兒就有…
- 2) 2-9-7 寄信人往美國去的信件多啗止收 2-9-8 局員…可以展到明兒個上半天兒九點鐘
- 3) 2-13-28 管事是了您明兒早起甚麼時候兒逝去 2-13-29 客人…八下兒鐘就走纔好哪
- 4) 1-2-13 …現在幾點鐘了 1-2-14 三下兒鐘了

3. 2 時量の表現

年数、日数は“多年”、“多少日子”、“幾天”で問い、「週」は“禮拜”で表し、“星期”は使わない。曖昧な「しばらく」を表す際は“一會子”と“一會兒”を使うが、話者の属性による相違がある傾向がある。具体的な時量の「60分」は“點鐘”と“小時”、“分”は“分鐘”、「15分」は“刻鐘”で表し、“幾點鐘”、“幾分鐘”、“多大工夫兒”で問う。用例9)の一つの会話の中で伝統的時量と新しい西洋式時量が混在した事例であると言える。

- 5) 3-13-12 中一天幾點鐘的功課 3-13-13 東每天兩小時
- 6) 2-12-26 乙在這兒停幾分鐘啊 2-12-27 甲八分鐘
- 7) 2-11-6 乙解這兒到車站得走多大工夫兒 2-11-7 甲得一刻鐘罷
- 8) 2-12-10 乙…起這兒到南京不是得三個時辰了麼 2-12-11 甲…總得七點半鐘的工夫兒哪…

4. 会話で使用される成語・多字句の定型表現

書院生の旅行・調査の実用教材である『北京官話旅行用語』は、硬軟様々に31種の四字句で比喩を示すが、初級テキストとしての本書は“3-18-25 甲所以說賊起飛智好在沒丟什麼 總算萬幸了 俗語兒不是說麼 年年防歉夜夜防賊一時都大意不得”など、僅か数例の俗語、慣用表現があるのみである。

5. 会話本文の語彙的特徴について

5.1で太田（1969）が示す北京語の特徴に基づき、本書の語彙の特徴を概観し、5.2～5.21は太田（1964）及び日下（1974）が示す南北差の特徴に基づいて考察する。

5.1 太田（1969）の北京語の語法特点に合致する特徴について

以下の7項目の結果が示すように、太田（1969）の全ての特徴と合致する。

5.1.1 一人称代詞の包括形と除外形“咱們”と“我們”を区別する

“我們” 69 例と“僭們” 42 例とで、基本的に明確に包括形と除外形の区別が見られる。

5.1.2 介詞“給”を用いる

介詞“給”は 100 例超の用例があり、極めて多く使われている。

5.1.3 助詞“來着”を用いる

“1-3-13 …幹甚麼來着” 1-3-14 念書來着” 等、過去の追憶を表す“來着”が 14 例ある。

5.1.4 助詞“哩”を用いず、“呢”を用いる

“呢”の 64 例に対して、“哩”は用例が無く、“哩”を用いない北京語の特徴に合致する。

5.1.5 禁止の副詞は“別”を用いる

“1-10-19 主那麼就先別買點心了等着張先生回來再說罷” 等、禁止の“別”が 52 例ある。

5.1.6 状語の程度副詞は“很”を用いる

程度副詞の“很”は極めて多数用いられている。

5.1.7 形容詞に“～多了”が後置される

“亮多了”、“貴多了”など、“～多了”で比較の差の大きさを表すものが 5 例ある。

5.2 人称代詞と関連表現

5.2.1 一人称

本書に“俺”や“咱(咱、僭)”が無いのは、「北京官話教科書として編纂」(初集凡例の第一項)され、会話が特定の出身地・階層の話者のみによるためである。自称は、北京語の“自各兒”が“3-8-16 主你打盆水來我自各兒洗洗罷”など 3 例、南京官話で使われる“自己”は“3-6-19 廚菜是我自己配啊”など 8 例ある。

5.2.2 二人称

“你” 163 例、“你們” 31 例のほか、敬称は“您” 442 例と“您納” 25 例である。“您納”は中流以下の階層の人物が相手に敬意を表す場面で多く、“2-13-30 管事是我這就給您定去決悞不了您納”のように、ほぼ句末に用いられる。下層で使われる“你老”の用例は無い。

5.2.3 三人称

“他” 65 例、“他們” 20 例以外に、敬称の“他納”が 1 例ある。日本人が勤め先で内地から赴任した同僚の中国語学習のために、中国人教師の斡旋を知己の中国人に依頼する場面の“3-13-15 東哦他納這是打那兒回來呀”で中国人教師を“他納”で呼んでいる。“他”の用例は無い。疑問は北方語の特徴の“誰” 11 例に対して、南京官話の“那個”の用例は無く、“甚麼人”は“1-5-19…他們家裡都有甚麼人” 1-5-20 爹媽爺爺奶奶都有”の 1 例のみである。

5.3 接尾辞「兒」と「子」

“兒” 780 例、“子” 150 例である。各用例の話者の属性は未検討であるが、接尾辞の使用は、全体的に北方語が勝っている。場所を表す代詞は“這兒” 42 例、“那兒” 73 例に対し、“這裏頭”、“這裡頭”、“那裏頭”は各 1 例で、“這裡（這裏）”と“那裡（那裏）”は無い。

5.4 代詞“甚麼”が“甚麼的”で列挙を表すもの

列挙を表す“等”の用例は無く、“1-13-6 賈現在有各樣兒的菓子和魚肉甚麼的”のように事物を問う代詞“甚麼”による“甚麼的”を名詞に後置する北京語の用法が 5 例である。

5.5 指示代詞“這麼、那麼、怎麼、多麼”と“着（著）、様、様兒、個”

“這麼” 54 例、“那麼” 66 例で、“那麼”の 46 例は連詞の用例で、“那麼”に起点・経由を表す“解”を前置する“解那麼”が“1-18-26 主不要車我們溜達着到斜橋解那麼坐電車去”など 4 例、“這麼着（著）”で「このように」を表すものが 8 例、“那麼着”が 1 例、量詞“個”を伴う“這麼個”が 8 例ある。“這麼”に“様”が付く場合も全て“1-16-7 師像這麼様兒念怎麼樣啊”のようにアール化して“這麼様兒”となる。疑問・感嘆の“多麼”も 1 例ある。

5.6 数量（金額）を尋ねる表現“多少錢”と“多兒錢”

数量を問う“多少” 24 例のうち、“1-13-13 客頂好的餅乾多少錢”など金額を尋ねる“多少錢”は 9 例で、同義のアール化“多兒錢”も“1-13-11 客白糖多兒錢一斤”など 5 例ある。“幾”の用例は無い。少量を表す“點兒（一點兒）”は 63 (8) 例、“些個”は 5 例である。

5.7 形容詞と比較の表現

北京語の比較文で形容詞の後に用いる“多了”が 5 例あるが、“得多（的多）”の用例は無い。また、“還、更”等の副詞に“要”を後置する南京官話の用例も無い。

9) 2-14-3 甲上船上打票不好麼 2-14-4 乙船上比票行裡貴多了

5.8 時間・費用がかかることを表す動詞

時間・費用のコストは北方語の“得” (9 例) で表し、南京官話の“要”は用いない。

10) 2-12-11 甲怕不行總得七點半鐘的工夫兒哪您從前沒走過這條路啊

5.9 「よく～する」を表す動詞

北方語で「よく～する」意を表す動詞“愛”が 1 例ある。

11) 3-1-27 秦可是年年兒趕到這個時候兒常愛下連陰雨花兒開不败老是叫雨給淋謝了

5.10 不可能を表す「～不了」10 例

可能補語の“不了”が“2-13-30 管事是我這就給您定去決悞不了您納”など 10 例ある。

5.11 実現・完了を否定する“沒”と“沒有”

動作・行為の実現・完了を否定する際は、“沒” (79 例) を用い、“沒有”は用いず、“沒有”

は反復疑問文か、句頭で「いいえ」を表す場合に限られる。

12) 3-6-8 主別處兒^沒待過麼 3-6-9 廚^{沒有}解出了師之後就待過這兩處

5.12 動詞接尾辞“達”5例

“達”を動詞接尾辞として用いるのは北方語の特徴で、南京官話には無い特徴である。“2-4-28 乙我還不餓哪僂們溜達溜達吃飯去罷”など“溜達”が5例ある。

5.13 程度を表す“得慌”

南京官話には無い“得慌”が“2-13-23 客人我坐不慣轎子又慙悶又顛^{得慌}倒是騎馬爽快…”1例のみで、南京官話で普通に用いられる“得很”が“3-4-28 主啊老太太沒來嫂夫人來了失迎^{得很}”など4例ある。この点に関しては北方語の特徴が濃いとは言い難い。

5.14 「あたえる」「給」の“V給”

“給”の総用例数 123 例のうち、介詞 86 例、単独の動詞“給”29例、受身1例を除く7例が“V給”（“交給”6例、“賣給”1例）である。

5.15 状態の完成への接近を表す“上来”

“上来”で状態の完成への接近を表すのは南京官話には無い用法で、本書では“2-7-6 乙火剛著^{上来}了您快來烤烤罷”のほか、動詞“念”、“背”、“説”を補って「考えを口に出して表現する」動詞の動作が滞りなくできることを表す用例が4例ある。

5.16 動詞“讓”

北方語はよく用いるとされる動詞“讓”が“2-5-32 實今天^讓我”など5例ある。

5.17 使役と受身の“叫(叫)”

使役を表す“叫(叫)”の用例は極めて多く、受身も2例ある。

13) 1-12-15 乙話是這麼説為甚麼^叫他醉的難受呢

14) 3-1-27 秦可是年年兒趕到這個時候兒常愛下連陰雨花兒開不敗老是^叫雨^給淋謝了

5.18 反復疑問と目的語の位置

本書では、北方語の反復疑問で目的語を肯定・否定の中間に置く特徴は稀である。

15) 2-6-16 唐^是那位細高挑兒長的很俏皮的^{不是}

5.19 介詞

5.19.1 起点を表す介詞

北方語の“解”が“1-20-18 丙是的您^解那個犄角兒上往北拐灣兒見”など29例で最多、同じく北方語の“起”が“2-12-10 乙所以説吃飯要筷兒行路要伴兒了^起這兒到南京不是得三個時辰了麼”など5例、“打”が“1-4-2 ^打家裡來”など1例ある。一方で、南京官話で用いる

“從”は“1-4-1 …您從哪兒來”の1例のみで、“由”は用例が無い。

5.19.2 行き先を表す“上”と“往”

行き先を表す際には北の特徴である“上”は“1-10-11 主哦他上那兒去了你知道不知道 1-10-12 僕不知道上那兒去了”など、南で多用される“往”は“2-9-7 寄信人往美國去的信件多嚙止收”など、いずれも用例が多数ある。“到”は動詞の用例のみである。

5.19.3 時間の到達を表す“趕”と“等”

時間の到達を表す場合では、北方語の特徴である“趕”は“3-18-6 乙可不是我先還當是猫哪趕我再細一聽是個賊解後房簷兒上跳下來了”など4例、南で用いる“等”は“3-4-34 主等都安置好了就方便了”など8例で、南北いずれの用例もある。

5.19.4 “給”、“跟”と“替”、“和”

介詞“給”は極めて多く86例あるが、“替”や“和”もそれなりに数があり、南北いずれかの特徴に特化していない。南ではあまり用いられない“跟”が“3-19-16 叔…我哥哥和他同學又一塊兒出過洋交情很厚的跟他說說他總不好意思推辭”など3例、助詞“着(著)”を伴う“跟着(跟著)”3例がある。“同”は助詞“着(著)”を伴う動詞の“1-15-7 客承問都好您這是同着賣着一塊兒來的麼”1例のみである。

5.19.5 依拠を表す介詞

依拠を表す“按”の用例は“按時”の1例のみで、南北共通で用いられる“照”が4例と助詞“着”を伴う“照着”が3例、南北いずれかに特化してはいない。“據”の用例は無い。

5.19.6 材料・用具を表す介詞

北方語に特有の“使”、官話で共通の“把”に用例は無く、官話で共通の“拿”には“3-9-16 洗是明兒給您多用點兒粉子漿再好好兒的拿熨斗熨一熨就敲正了”の用例がある。

5.20 副詞

5.20.1 “挺”、“頂”と“很”

太田(1964)は「挺」が北方語、「頂」は南で用いられた」と述べ、陳(2016)98頁及び陳(2018)91頁は、副詞“挺”の初出を1830年代の《正音撮要》とし、明治・大正の中国教科書での用例は少ないとする。本書は「北京官話教科書」を標榜するが、北の特徴とされる“挺”の用例が無い一方で、“頂”は“1-13-13 客頂好的餅乾多少錢一匣 1-13-14 賣一塊四”など2例あり、ほとんどは“很”(64例)を用いる。

5.20.2 “老”と“總”

時間が長いことを表す“老”、“老是”は極めて多く、“3-20-2 病豈敢我是瀉肚好幾天了老

止不住”、“3-1-27 秦可是年年兒趕到這個時候兒常愛下連陰雨花兒開不敗^{老是}叫雨給淋謝了”などがある。“總是”は“2-10-11 乙總^是要有要緊的事情心裡著急的緣故”など9例ある。

5.20.3 “這就”、“乍”と“將就”

「これからすぐ」の意を表す北方語の“這就”が“2-13-30 管事是我^{這就}給您定去決悞不了您納”の1例、“乍”が“2-16-15 主…你這^乍來工錢是不多往後我看你若真是真勤謹也不能白叫你受累”など5例、長江流域で使われるところがあるという“將就”が“2-13-10 管事這是頭等官房別的屋子比這還不濟您更看不上了請^{將就}著住罷”の1例である。

5.20.4 いくつかの“都”

疑問文で該当する全てを列挙させる“1-5-19 …他們家裡^都有甚麼人 1-5-20 爹媽爺爺奶奶都有”のような特指疑問の“都”が2例あり、また“2-11-3 甲嘆七點^都過了二十分了您該動身了 2-11-4 乙可不是”のように“已經”の意も2例ある。

5.20.3 その他4つの副詞

北方語で「しきりに、とめどもなく」を表す“直”が“3-18-16 乙是了這一下兒可把我嚇著了我就大聲兒的^直喊有了賊了…”など2例ある。同じく北方語で「なるほど、道理で」を表す“敢情”は“1-22-3 甲怪不得冷哪^{敢情}北邊兒下大雪來著啊”の用例があるが、これに相当する南の用例が無い。推測を表す“也許”は“3-9-6 洗我們可是不敢疏神的大概是件數兒多了^{也許}有搓不到的地方兒”など2例あるが、南の“想是”、“或者”、“敢是”は無い。

北京語で「すっかり、ぜんぜん」の意を表す“所”が“3-9-5 主件數兒倒對了怎麼你們洗的老是不漂亮你看看這汗褸兒上頭的泥^所沒洗掉”など2例ある。

5.21 北方語の特徴的な助詞“似的”、“得了”と“咖”

類似を表す“似的”が“3-7-10 下是不錯我瞧見過外面^像個大箱子^{似的}…”など4例あるが、南京官話の“和～一樣”は“3-11-7 中…西裝也^和貴國^{一樣}了”1例のみである。文末に用いて「～すればそれでよい」意を表す“得了”が“3-8-14 主竟刮刮下巴兒兒就^{得了}”など5例あるが、これに相当する南京官話の用例が無い。接尾辞“咖”は、“3-5-25 甲電燈自來水和房錢都在一塊兒麼 3-5-26 乙^{不咖}那都是另外的”などいずれも“不咖”で2例ある。

6. さいごに

1916年初版の『華語萃編』初集は、本文が北京官話、北京語、北方語といった言語の特徴的な語彙が使用され、成語等の上級の表現を使わない初学者向きテキストである。旅行の実用に特化した『北京官話旅行用語』が提示する移動のことばとは対照的に、都市に定住する

中流以上の階層での「北京官話」（凡例）による日常生活に必要なコミュニケーションを示したテキストとも言える。また、内容からは当時依然として時間表現の伝統と西洋式の混在があったことが窺えるし、固有名詞などから当時の社会の様子を窺うこともできる。但し、会話の登場人物の属性による表現の差異の有無などについては更に詳細な分析が必要がある。

注

- 1) 『華語萃編』成立までの経緯は石田（2019）が詳細に辿っており、同書成立後の東亜同文書院の中国語教育は今泉潤太郎（2007）「『華語萃編』から見た同文書院の中国語教学」、松田かの子（2001）「官話教科書『華語萃編』の成立に関する一考察」、同（2005）『『華語月刊』と東亜同文書院の中国語教育」、石田卓生（2010）「東亜同文書院の中国語教育について」、（2017）「戦前日本の中国語教育と東亜同文書院大学」等があるが、『華語萃編』の文法・語彙の特徴については、中国語学の視点からの考察が不可欠である。
- 2) 呉語の諸方言のビール音訳語“皮酒”の語史は田野村（2023）pp.476-488 に詳しい。

参考文献

- 太田辰夫（1964）「北京語の文法特点」『久重福三郎先生坂本一郎先生還暦記念中国研究』（再掲：太田辰夫（1995）『中国語文論集 語学・元雑劇編』汲古書院）
- 太田辰夫（1969）「近代漢語」中国語学研究会『中国語学新辞典』光生館
- 日下恒夫（1974）「清代南京官話方言の一斑—泊園文庫蔵《官話指南》の書き入れ—」『関西大学中国文学会紀要』第5号
- 陳曉（2016）「清朝後期の副詞「挺」について」『中国語研究』第58号白帝社
- 陳曉（2018）『北京官話全編』の副詞『北京官話全編の研究一下巻』関西大学出版部
- 石田卓生（2019）『東亜同文書院の教育に関する多面的研究』不二出版
- 田野村忠温（2023）『近代日中新語の諸相』和泉書院